

★最大の山場・県大会決勝

東部・県・関東・全国総体・・・。

長く高校生の大会を観て自らも身を置いてきたが、やはり心情的にも周囲の注目度も「県大会予選」が最も緊張する試合ではないだろうか・・・。

全国総体で優勝を狙っている層は全競技者の数万分の一。それ以外の強豪選手もかなり真剣に調整し、県大会に挑む。人口の多い（競争率の高い）都道府県は決して安易なレベルでなく、紙一重で全国の切符を逃す有望な選手は多いと思う。5月、故障や調子が上がらず、「あれ・・・あれ・・・」という間にかかなりの競争率の舞台にさらされ、体調や精神面で自己記録すら届かない辛酸をなめる場面を数多く見てきた。だから最初から私は、県大会は絶対に県新人より成績は下がるのは当たり前・・・と思っている。

無論、自分らもそうだった。

そんな中、我が春日部高校陸上競技部は入賞者を多々生んだ。

400m 6位、400mH 6位、1600mR 6位、3000mW 5位、6位、砲丸投げ 7位、ハンマー投げ 7位。

撮影できたメンバーの戦いの写真を載せます。（グラウンド側から撮影の安藤先生の写真も拝借しました。）







決してメンバーは好調ではなかった。

しかしメンバーをやり繰りして予選、準決勝、決勝までコマを進めた。埼玉のアンカーはみな48秒台で走るだろう。この極限のプレッシャーの中、鈴木は打ち勝って6位入賞を決めた。

2006年の400mR以来となるリレーの関東進出。冬の練習では「リレーで全国へ！」が皆の心の誓いであった。倒れそうになるほどの厳しい追い込み練習にも耐えた。

願いは叶った。

気が付けば、すでに2005年、奥岡らの歴代記録は越えてしまっていた。

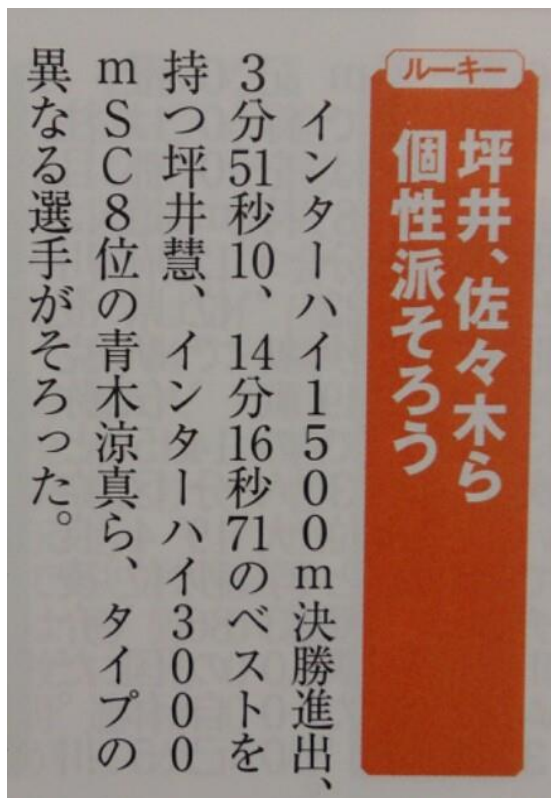
★OBの活躍

OBとして選手ご両親と応援していると、卒後も会場でお会いすることが多く話が弾む。

春高10人目の全国覇者の青木涼真選手は、春高の卒業式を最後に大学寮に即入居したらしい。さすがに期待の新人、大学もあたたかく迎え入れてくれ、非常に充実した日々を送っているという。理系なので勉強と、練習と・・・で忙しい様子。先輩たちも春高のようなフレンドリーな雰囲気です練習も充実し、好調であるという。

今年の駅伝特集雑誌で「期待の選手」として取り上げられていた。

そして先日の関東インカレでは8分51秒をマークし見事決勝進出を果たした。1年生としては上出来すぎて心配だが、とにかく高校・大学と彼にとって楽しく水があっていることは我々としてもうれしい限りである。



★父兄、OB達と

幾人かのOBの先輩方がスタンドで私のシャツをみつめて応援に駆け付けてくれた。

最終的には選手のご家族（新OB青木くんのご両親とも）と応援していた。

OBの先輩方といろいろなお話をした。歴代の顧問の先輩もいらした。

年齢が上がって、より多くの方々を見守る重責を持ち、より広くものを観ていらっしゃるお考えにはとても感銘を受けた。

やはり組織全体がうまくいくためには、表面には見えない様々な労力があってこそ・・・であると教えていただいた。私も全く同感であった。全方面に気を遣い、コンタクトを絶やさず、取り計らう・・・簡易に聞こえるが想像を絶するほど心労があるだろう。

同じベクトルでOB会の話もした。過去コラムで表記したが、関根先生、小原先生らが縦横のつながりを構築し、竹村先生、高野先生、大塚先生へ繋いでくださった。このしっかりした縦パイプがあってこそ横のつながりも安定していった。

皆様の共通した考えは「OB会は現役のためにある。お金も意見も現役のために出す。」

「しっかりした選手のための教育環境を」・・・である。

OB会は管理するのではない。現役支援団体だ。しかしOB会役員(会を運営する役を担う人)は監督らとしっかり連携をとっている必要がある。どんな選手がいて誰が何を教えているのかお任せで、丸投げするわけにはいかない。今は同門が受け継いでいるから大きな問題にはならない。いずれそうでない時代も来るかもしれない。その時に右往左往してはならない。他チームでみるような顧問別OB会に離散してしまうわけにはいかないのだ。



穏やかな田園風景が広がる東部地区。その環境が穏やかな人柄を育む。

平穏で温和な風土に生まれたそのチームは、全国制覇10人12回、インターハイフィールド優勝、総合入賞2回の歴史を持つ。しかし、決してとげとげしくならず、上下関係で縛ることなく、真面目に勉学にも励んだ全国的にも稀な校風・・・この奇跡的な環境が「春陸」である。継続していかなければなるまい。

筆 野本